

イエスを「見る」祈り

*参考資料 「目からうろこ 福音書の中イエスを「見る」祈り」 来住英俊著 女子パウロ 2007年 750円

福音書は「イエス・キリスト」を知らせるために書かれた書

前回、レクティオ・ディヴナは、ここだ大切だと決めつけずに読むことが大事なポイントです、とご紹介しましたが「イエス・キリスト」を知らせるために書かれたことは意識しておくべきでしょう。

私たちは、新約聖書によって受肉した神である「イエス」を見るのではないのでしょうか？

お告げの祈りー「み言葉は人となり、わたしたちのうちに住まわれた」

旧約聖書とは異なり、新約聖書では、み言葉を聞くだけでなく、人となられた神(イエスの行動)を見ることができます。

旧約聖書の神の神の顕現シーン

直接神と顔を合わせることはない。

雷鳴・嵐・雲・風の中に神はおられる。

イエスとフィリポの会話

「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます。」(ヨハネ 14 : 8)

「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。」(ヨハネ 14 : 9)

イエスの昇天後まず「福音書の中に」イエスを見ます。

福音書の中にイエスを「見る」ポイント

- ①「イエス」にまずスポットを当てる。
- ②イエスの発言よりも、まず行動・振る舞いに注目する。
- ③イエスの日常の生活を見つめる。
- ④現代の問題を、すぐにイエスと結びつけない。
- ⑤場所と時間を意識する。
- ⑥想像力を働かせて読む。

1. つい弟子たちを見てしまう

福音書には、多くの登場人物がいます。その中で、私たちは弟子たちの言動に注目しがちです。それは、自分の鏡で反省材料になるからです。しかし、その読み方は、イエスの影を薄くすることにも

つながります。「私は気をつけよう」というところで理解のふたをしないでください。

また、

さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。(マルコ 6 : 30)

の箇所から、弟子が代わる代わる報告するのを聞くイエスを想像するのもいいでしょう。真剣に、穏やかに、ユーモアを交えて弟子の話聞き、アドバイスを送るイエスを眺めてみましょう。

さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい。(6 : 31)

の箇所にしても、イエスがどのように弟子をねぎらい、休息を勧めたか想像してみましょう。

2. ユダを見てしまう

最後の晩餐の場面で、なぜユダは裏切ったのか、ユダは救いのドラマのために必要だったのか？といった知的好奇心を探求する読み方になっていないでしょうか？ 福音書は、心理学的な理由を探求する以上の書物です。むしろ、「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切る」(マタイ 26 : 21)と言われたイエスの姿を見つめることの方が大切でしょう。イエスから離れる誘惑にある時、イエスの言葉が思い起こされるような読み方をしましょう。

イエスの振る舞いに注目する

1) 動詞に注目する

イエスの癒しの場面ーイエスが(彼女の)そばに行き、手を取って 起こされると、熱は去り・・・(マルコ 1 : 31)

イエスの動作を示す動詞に注目することで、イエスの慈しみが心にしみてきませんか？

2) イエスは言われた・・・(必ずしも、「イエスは言われた」と書かれていなくても補って読んでみる)

イエスはどのような立場、心鏡で言われたのかを想像し、補足してみる。

主であり、師である私があなた方の足を洗ったのだから、あなた方も互いに足を洗わねばならない。
(ヨハネ 13 : 14)

↓

(裏切られる前に)イエスは言われた、「私がしたように、あなた方も互いに足を洗い合いなさい。」

3) イエスが語られる時の表情に注目する (必ずしもイエスが語る時に修飾語がなくても想像してみる)

イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい、清くなれ」と言われると… (マルコ 1 : 41)

イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に「てを伸ばしなさい」と言われた。(マルコ 3 : 5)

4) イエスの日常に注目するー論争よりも生活

福音書には、ファリサイ派との論争の場面が何度も登場し、指導者との対立のために地上に来られたような印象も受けますが、そうでしょうか？ イエスは平和の人で、人間の中で暮らし、教え、共に食事を摂るために来られたのです。論争は、この目的を果たす中で起きたことです。また、聖書の中には特徴のある人が多く登場しますが、イエスはごく普通の庶民ともたくさん関わられたのではないのでしょうか？ (

医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪びとを招くためである。(マルコ 2 : 17)

多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席していた。実に大勢の人がいて、イエスに従っていたのである。(マルコ 2 : 15)

5) 道中のイエス

一行が歩いて行くうちに、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。・・・(ルカ 10 : 38)

有名な、マルタとマリアの話は、イエスの宣教生活の普通の出来事の中から起こりました。イエスとその弟子の一行は、村から村へ、町から町へと旅をしていました。ある面、水戸黄門の姿と重なるかもしれません(私見ですが)。来る日も来る日も歩いて来たので疲れ、そしてマルタとマリアのいる村に入られました。彼女たちの家に招かれ(その時以外にも善意の人々に支えられながら)、夕食を共にされたのでしょう。そのような背景があつてこそ、「マルタは、いろいろのもてなしのためにせわしなく立ち働いていた」というフレーズも目の前に浮かびあがってきます。マルタとマリアの対比も、単なる活動

か観想かの論議ではなくなります。

大体において、一つの箇所の中で、議論の種になる話は、後半にあります。それに対して、イエスの日常の姿は冒頭部分にあります。それを見逃さないで下さい。後半の目立つ部分にのみ関心を持つことは、何事かの出来事が起きた時のイエスだけに興味を持つことになり、受肉したイエスの一部しか見ないことにもなります。福音書の言外にある、ごく普通に生き、普通に人々と関わられたイエスの姿にも目を留めましょう。

6) 地図を見る

イエスは、時間と空間の中に生きていました。イエスが、今どこにおられ、どこに向かって移動しておられるのか意識しながら読むと福音の世界に奥行きが感じられるようになります。(地理に疎い方は無理をする必要はありません)

その頃、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。(マルコ 1:9)
洗礼者ヨハネは、ヨルダン川の向こう側のベタニヤで洗礼を授けていました。(ヨハネ 1:28)

(異説もあるそうです。また、このベタニヤはエルサレムに近いマルタとマリアの町とは異なります。ヨルダン川が死海に流れ込む地点に近い東岸です。

ナザレは、ガリラヤから相当離れており、ユダヤ人はサマリアに足を踏み入れなかったことから、ヨルダン川の東を渡って、川沿いに南へ下ったと思われます。そのため、イエスは洗礼を受けに 100 キロ以上の移動とそのための時間を労したことがわかります。ヨハネから洗礼を受けるために、それだけの距離を黙々と歩くイエスの姿を想像してみましょう。もう少し、想像力を働かせてみましょう。ナザレからはるばる歩いてきたイエスでしたが、洗礼を受けるために長い列ができていました。洗礼を授けるのは、ヨハネ一人ですし、洗礼を望むのはエルサレムとユダヤ全土から集まった人々だったからです。そして、イエスは静かに行列の最後に加わり忍耐強く自分の番が来るのを待っています。イエスは、洗礼のために水をかけられる(当時は全身水に浸りましたが)ために長い時間を暑い中待たねばなりません。待つ間、隣の人といろいろな会話をしたでしょう。

7) 時間の経過を読む

彼女は、一同をもてなした。・・・夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊にとりつかれた者

を皆、イエスのもとに連れて来た。町中の人々が、戸口に集まった。(マルコ 1 : 31～33)

ユダヤ人の一日は、日没から日没までです。つまり、夕方までは安息日なので、病人を医者の方に連れて行くことはできません。医療行為は、仕事となるからです。このようなことを頭に入れると、シモンの姑が癒されてから日没までの時間の流れが感じられます。イエスはシモンの家におられて、お茶など飲んでくつろいでおられました。一方、人々は素晴らしい癒し手がこの町に来た噂を聞いて、町中の病人とその家族は、安息日が終わるのを今か今かを待ち構えていました。「……」は聖書にはありませんが、時間の経過を味わってから次に移ると、イエスと病人たちの出会いがよりリアルに感じられます。どっと、人々が押し寄せる様子、それを迎えるイエスの表情を想像してみましょう。

イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主がいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。……そのうち、時もだいぶ経ったので、弟子たちがイエスのそばに寄って来て言った。(マルコ 6 : 34～35)

読者は、具体的に何を教えられたかわからなくても、イエスが人々に親切に教えておられる時間の経過を意識して見つめた方がいいでしょう。そうしてこそ、次に繰る「男だけで5千人の群衆に十分食べさせる」という出来事が見えてきます。

8) 想像力を正しく用いる

福音書を読む時に、誰でも多かれ少なかれ、想像力を働かせます。しかし「自分の思いを、聖書に読み込んでいるだけではないか？」という不安がもたげるかもしれません。心配はいりません。その読み方が正しいのです。聖書学者の営みと、今の私に呼びかける神の声とは異なることが十分あり得ます。聖書学は、確かに聖書が書かれた意図がどこにあるかを正確に探ろうとしますが、それにしてもやはり人間のすることなので限界があります。聖書は、神と人間が会う場として私たちに与えられています。知識の多い少ないに関わらず、聖書は私たちに神のメッセージを語り、今の私がそれを受け取ればいいのです。

ただし、あまりに突拍子もないことを想像していると感じられるならば、次のことに留意してください。

- ・ 聖書の言葉をじっくり味わうことをやめない。常に聖書という糸を想像力の凧につけておく。
- ・ 聖書に知識や解釈学の知識を自分の力に合わせて取り入れる。主日の『聖書と典礼』の下段にある説明を読むだけでも蓄積になります。

- ・ 自分に浮かんだイメージについて霊的相談者と相談する。

9) 当時の社会学的知識

当時の社会に関する知識も、聖書を想像力を使って読むヒントとなります。たとえば、当時のユダヤ社会の中で、男性が 30 歳過ぎて独身でいることは極めて珍しいことでした。ユダヤ人にとって結婚して多くの子どもに恵まれることこそが、神の祝福の現われだと信じられていたからです。イエスは、その年齢まで何を考えてこられたのでしょうか。ご自分の使命に対するぼんやりとした予感があったのでしょうか？ 町の人はイエスにお嫁さんを紹介することなどなかったのでしょうか？

10) イエスの受難を見る

具体的箇所として マルコ 10：17～30 <金持ちの男>

17 イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいのでしょうか。」18 イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。19 イ『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」20 すると彼は、「先生、そういうことはみな、子どもの時から守ってきました」と言った。21 イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富みを積むことになる。それから、わたしに従いなさい。22 そうすれば、天に富みを積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。沢山の財産を持っていたからである。

23 イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、何と難しいことか。」24 弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、何と難しいことか。25 金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」26 弟子たちはますます驚いて、「それでは、誰が救われるのだろうか」と互いに言った。27 イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」28 ペトロがイエスに、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」と言い出した。29 イエスは言われた。「はっきり言うておく。わたしのため、また福音のために、家、兄弟、姉妹、

母、父、子ども、畑を捨てた者は誰でも、³⁰ 今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子ども、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。」

番外編 注釈書などによる知識 ご参考までに！

☆前後のつながり

☆構成 3つの部分からなる

1) イエスと金持ちの対話(17～22) 2)財産についてのイエスと弟子たちの対話(23～27) 3)家を捨ててイエスに従う者に対する永遠の命の約束(28～31)

1) イエスと金持ちの対話(17～22)

イエスが旅に出ようとされるとーイエスが受難の道を歩んでいること。この箇所全体は、全財産以上の放棄、すなわち十字架に道を歩むイエスに従うことを求めている。

金持ちーマタイは「青年」、ルカは「議員」

走り寄って、ひざまずいてー男の熱心さを絵画的に描いている。

教えるーマルコ福音書はイエスを「教師」として描く。「教える」という動詞がマルコでは17回登場し、そのうち16回はイエスが主語。「先生」という呼称も11回登場している。

永遠の命を受け継ぐ(相続する)ーユダヤ的表現で「神の国に入る」と同義。

善い先生ー青年がこのように呼び掛けたのは、単なるお世辞であつたのか、本心であつたの定かではないが、イエスは『善い』と呼ばれることを拒む。マタイ19:17では「善い方はおひとりである」と表現している。イエス自身は、神の意志をひたすら求め、教え、それに従うことしか頭になかったのか。

十戒についてー後半の戒めだけが挙げられている。前半部分の神へ愛と隣人への奉仕も無視できない。慈しんだーイエスは、青年を助け、導こうとされた。そのために尚彼が欠けている一つのことを示す。それはイエスのへの随従であるが、そのためには全ての所有物を売って貧しい人に施すことを意味する。これは、ユダヤ人の施しの習慣を超える急進的(過激とも言える)な要求である。福音書の中で、イエスへの随従を拒んだのは彼ひとりである。

天に富みを積むー人間の功績によって神が与える報酬としての救いではなく、自分の存在根拠を神(天)に求め、神を中心とする生き方を示す。

財産ー複数の土地。彼は大地主だったかもしれない。信仰にとって富の危険は大きい。